

戦後の台湾伝道庁復興に向けた動き

戦後台湾における天理教の変容

前回(9月号)までは2回にわたって戦後台湾における天理教の変容について、現地人信者が特に多かった山名大教会に所属する嘉義東門教会と斗六教会の状況について紹介した。第2次世界大戦の敗戦により、日本は台湾の領土を失った。そして新たに統治することになった中華民国(中国国民党)は、日中戦争で戦った敵国日本の影響を台湾社会から一掃する政策を取った。この対策として現地人信者たちは神像や香炉などを設置し、漢人民間信仰の廟のようにカムフラージュして、官憲による弾圧を避けようとした。

特に斗六教会に所属していた元布教所は、当時唯一合法的な組織として認められていた中国仏教会という仏教団体に所属することで、なんとか布教所として存続しようとした。このことは、すでに指摘したように嘉義東門教会があった嘉義市と斗六教会の元布教所があった雲林県とは、天理教に対する態度に大きな違いがあったことによる。戦後の台湾社会を理解するためには、二・二八事件と戒厳令について説明する必要がある。

二・二八事件と戒厳令

二・二八事件とは、1947(昭和22)年2月28日に台北市で発生し、その後台湾全土に広がった国民党政府による長期的な白色テロ、すなわち民衆への弾圧・虐殺の引き金となった事件である。

この事件は、前日の2月27日に、台北市内でタバコを販売していた台湾人女性に対し、取締の役人が暴行を加えたことが発端である。翌28日には台湾人による市庁舎への抗議デモが行われた。憲兵隊がこれに発砲したことで、抗争はたちまち台湾全土に広がることとなった。台湾人は多くの地域で一時的には実権を掌握したが、政府は中国本土から援軍を派遣し、武力によりこれを徹底的に鎮圧した。そしてこの事件で発令された戒厳令は台湾省政府の設立によりいったん解除されたが、1949(昭和24)年5月19日に改めて発令され、1987(昭和62)年まで38年もの長い間続けられることになった。この間、政治活動や言論の自由は厳しく制限され、政治・思想犯の投獄や処刑などにより、厳しい恐怖政治が続いた。

また、この事件をきっかけに日本統治を経験している「本省人」と戦後に中国大陸から中国国民党とともに渡ってきた「外省人」の間に亀裂が入り、その関係に深い溝を生じさせた。このことが、本省人の日本色を一掃することが外省人による国民党政府によって推し進められる背景ともなった。

台湾伝道庁復興に向けた動き

このような厳しい社会状況の中でも、台湾の天理教信者たちは信仰を続け、つとめやさづけによる布教活動が展開されていた。

天理教教会本部では長く続いた戦争が終わったことで、官憲による弾圧もなくなり、終戦後すぐに教祖の教え通りの姿に天理教を戻そうという「復元」が2代真柱中山正善によって進められ、教義書である「天理教教典」は、戦前のいわゆる「明治教典」から現在の「教典」へと大きな転換が行われていた。しかし当時は、日本と台湾は人的往来はもとより、郵便物なども台湾では検閲されることから、このような大きな転換を知らせる方法もほとんどなかった。

天理教にとっては、教会本部がある「ぢば」が人類救済の根本であり、全人類のふるさとであるという考えから、「おぢばがえり」が重要な信仰実践であるのは言うまでもない。それにとどまらず、

「おさづけの理」は「ぢば」で教理の話を9回繰り返して聞くことで戴くことができることから、おぢばがえりは信仰を实践する上で不可欠なのである。戦後台湾の天理教にとっては、戒厳令下でも取締を恐れずに布教活動ができるための政府による「教団の公認」と、日本と台湾の間で人的往来ができる「渡航の自由」の実現という2つのことが、重要な課題となっていたのである。

教会本部としてまず取りかかるべきは、戦後も組織体制の上では戦後も存在し続けている「台湾伝道庁」をどのように再び台湾の地で設置し、台湾伝道を復興させる中心となる人物を庁長として赴任させるかが急務となった。そこで1967(昭和42)年1月26日のお運びで、台湾伝道庁の8代庁長として本部青年であった三濱善朗が任命された。三濱庁長がまず取りかかったのは、布教目的で渡台するためのビザの取得であった。

2代真柱は1960(昭和35)年に海外巡教の帰路、台北にある松山空港に立ち寄り、また1963(昭和38)年にも海外巡教の帰路に台湾を訪問している。1960年に松山空港に立ち寄った際の感想を、2代真柱は次のように記している。

パスポートを取りあげられての外出など、すでに台湾は、外国となったのだとの感じを強くしました。しかし、休憩室近くに、十数名の人々が、手を振って迎えていてくれるではありませんか。`おお高!、とまず睦信が声を出しました。彼と天理中学校で同窓だった高万益君が迎えてくれているのです。`私は劉義人です。語学校卒業です、と名のりをあげました。柔道部にいた劉君で、数年前天理大学の柔道部を招聘したその契機をつくった人です。私の通過を知り、わずか垣根越しの逢瀬をもとめ、嘉義やその他の遠路を、はるばる訪ねて来てくれた人々なのです。涙の出る思いは、彼我ともに同じであります。`早く伝道庁を置いてください、`私たちの子供が、おぢばの学校で学べるようにしてください、と異口同音に申されました。`骨を折りましょう、としか答えられない私の心情はいかがであったでしょう。(中山正善『北報南告』天理教道友社、1960年、212～214頁)

さらに1963年の台湾訪問には、随行した高橋道男海外伝道部長は、次のように記している。

木村大使の案内で総統府に秘書長張群氏を、続いて自宅に何応欽將軍を訪問する。御兩人共知日親日の巨頭で、張氏は現に蔣総統の下にあって実力を持つ人である。併し、共に基督教徒で、日本語を好くするが、天理教については知る所がない。夫々快く会談し、教典、要覧等書籍を献ずることとする。張氏から、何か希望があればというので、真柱様から台湾に熱心な信者が相当数あって、日本から指導者を求めているので、適当な者の入台が出来ることを要望したいと申入れられる。まことに勿体ないことである。(高橋道男「海外巡教見聞記」『みちのとも』1963年12月号、74頁)

こうした記述からも、2代真柱が、戦後自由に布教活動もできず、おぢばがえりすらできない台湾の信者の切実な願いを受けて、台湾伝道庁を復興するために庁長を赴任させたいという強い思いを有していたことが窺われるのである。